

NAGASAKI  
じんけん歴史散歩  
大村コース

大村湾沿岸を  
フィールドワーク  
する

NPO法人 長崎人権研究所



## 大村湾について

長崎県の中央部に位置する大村湾は、360kmの海岸線を持つ袋状の湾です。水深は最も深いところで54メートル、平均深度は14.8メートル。中心部の流れは毎秒2~4cmとおだやかです。

地質調査によれば約9000年前は谷であり、海水侵入によって約7000年前に大村湾が形成されたといわれています。

古くから天然真珠の産地で、天正遣欧少年使節がローマ法皇へ贈ったのも大村湾の真珠でした。

また江戸～明治時代、大村湾隨一の港町であった彼杵宿は、捕鯨の中継基地として栄えました。

大村湾には、ナマコ、アラカブ（カサゴ）、エビ、イカ、サザエなど約230種の魚介類が生息しており、冬には多くの渡り鳥も飛来します。湾の入口が狭く、海水交換が少ない超閉鎖性内湾のため、いったん水質が悪化すると元に戻すことは容易ではありません。豊かな恵みをもたらしてくれる大村湾の環境を守り伝えていくことが求められています。

(イ)

## 大村湾沿岸をフィールドワークする —キリスト教受難と戦争の遺構を訪ねて—

### 目次

大村湾について	1
<大村マップ>	
①坂口館跡(大村純忠終焉の地)	2
②天正遣欧少年使節顯彰之像	3
③首塚(胴塚)	4
④放虎原殉教地	5
大村藩とキリスト教	6~7
郡崩れ	8
池田乱民の変	9
⑤第21海軍航空廠	10~12
⑥本経寺	13
⑦石井筆子の像	14~15
⑧針尾山トンネル工場跡	16
朝鮮人の強制労働	17
⑨鈴田牢跡	18
⑩浦頭引揚記念平和公園	19
⑪針尾送信所無線塔	20
⑫釜墓地	21
⑬無窮洞	22
⑭特攻殉国の碑	23
⑮片島魚雷発射試験場跡	24
<佐世保・川棚マップ>	

# 大村マップ



## 1 坂口館跡（大村純忠終焉の地）



大村市荒瀬町大門

日本最初のキリスト大名として有名な大村純忠終焉の地である。山の斜面に庭園の一部や泉水が残っている

大村純忠は、1533年（天文2）に有馬晴純の二男として生まれ、1538年（天文7）に大村家に養子として入り、1550年（天文19）家督を継いだ。この時、大村家の実子貴明は武雄の後藤家に養子として出された。こうした経緯から、領内には貴明を支持する者が多かった。また周囲には肥前龍造寺や平戸松浦氏、諫早の西郷氏など敵対勢力も多く、統治は困難を極めた。領地も一門の支配地が多く、直轄地は大村周辺と大村湾対岸を支配するに過ぎなかった。この打開策として見出したのが南蛮貿易である。

これまでポルトガル船は松浦氏の平戸港に入港していたが、トラブルを起こし、新しい港を求めていた。そこで純忠は、1562年（永禄5）に横瀬浦を提供し、ポルトガル船を迎えた。翌1563年（永禄6）には家臣とともに洗礼を受けた。しかし横瀬浦は、1年足らずで後藤貴明と領内の反対派に焼き討ちにされたため、つづいて福田を、1571年（元亀2）には長崎を開港した。ポルトガルとの貿易を盤石にするため、1580年（天正8）には、長崎をイエズス会に寄進している。

また、1574年（天正2）に領内の寺社を焼き払い、キリスト教信仰を奨励したため、信徒は6万人を超えた。これは、当時国内の信徒の半数を超えるといわれ、大村はキリスト教天国の観を呈した。しかし晩年には龍造寺隆信の圧迫を受け、隆信が1584年（天正2）に沖田鱗<sup>おき</sup>で戦死するまで、ほぼ従属状態に置かれた。長男の喜前に家督を譲ってこの地に隠居し、1587年（天正15）に亡くなった。

## 2 天正遣欧少年使節顕彰之像



大村市森園町

天正遣欧少年使節は、日本でのキリスト教布教の責任者であったヴァリニャーノ神父によって、九州のキリスト大名（大村純忠、大友宗麟、有馬晴信）の使節として派遣が計画された。

使節に選ばれたのは、有馬のセミナリオ（神学校）で学ぶ4人の少年である。正使は、日向伊東氏出身の伊東マンショ、千々石出身の有馬晴信の従弟で大村純忠の甥でもある千々石ミゲル、副使は波佐見出身の原マルチノ、七ツ釜出身の中浦ジュリアンである。

1582年（天正10）2月20日、長崎港を出発し、マカオ・マラッカ・コーチンを経て、翌83年12月20日インドのゴアに到着。84年8月10日にポルトガルのリストボンに到着。スペインのマドリッドを経て、ローマに到着し、85年3月1日にローマ法王グレゴリオ13世に謁見した。

1586年4月8日帰国の途に就き、88年7月28日にマカオに達したが、すでに日本国内では禁教令（伴天連追放令）が出されていたため、帰国が2年間延期され、1590年（天正18）7月21日に長崎に帰国した。1593年（文禄2）、4人はイエズス会への入会が認められたが、その後4人が歩いた道はさまざまであった。司祭となった伊東マンショは、1612年（慶長17）に長崎で病死。原マルチノも司祭となり、1614年（慶長19）にマカオに追放された。千々石ミゲルは、イエズス会を退会し、その後棄教。その墓とされる場所が、はるかに大村湾を隔てて伊木力に遠望できる。中浦ジュリアンは、潜伏して布教を続けるが、捕縛され1633年（寛永10）に西坂で穴づりの刑で殉教。「私がローマに行った中浦ジュリアンである」と叫んだといわれる。

### 3

## 首塚（胴塚）



首塚



大村市原口町

胴塚

大村の地は、領主大村純忠がキリスト大名であったことから、領民すべてがキリストとされ、キリスト教が大変盛んであったが、豊臣秀吉や徳川幕府によるキリスト教禁教政策で大村藩でもキリスト教が禁止され、領民は改宗を厳しく迫られた。

島原の乱から20年後、領内には信者が一人もいなくなったと思われていた1657年（明暦3）、郡村を中心に隠れてキリスト教の信仰を続けていた人たちが発覚する。

発端は郡村の百姓が、長崎で知人に郡村のキリストについて漏らしたのがはじまりで、これが長崎奉行に伝わり、大村藩の潜伏キリストの搜索が始まった。

その結果、608名が捕縛され、キリスト弾圧史上、まれに見る潜伏キリスト発覚事件となった。これを「郡崩れ」といい、あまりの逮捕者の数に、大村藩だけでは対応できず、周辺の藩にも分散して預けられた。逮捕者のうち411名が打ち首になるが、そのうち131名が放虎原で処刑された。信者の首は見せしめとして街道に面した獄門所に20日間晒され、その後キリストの妖術で首と胴が繋がって復活することを恐れたため、首と胴は別々の場所に埋められた。この首塚の他に桜馬場に胴塚がある。

この事件をきっかけに大村藩ではさらに厳しい禁教政策がおこなわれることになる。

### 4

## 放虎原殉教地



日本二百五福者殉教顕彰碑(表)



大村潜伏キリスト教徒殉教顕彰碑(裏)



大村市協和町

二つの碑が表裏になっている。一つは、「日本二百五福者殉教顕彰碑」であり、もう一つは「大村潜伏キリスト教徒殉教顕彰碑」である。ここ放虎原は、大村藩の斬罪所であったため、多くの処刑が行われたが、キリスト王国であった大村では、多くの宣教師や信徒が殉教することになった。

### (1) 「日本二百五福者殉教顕彰碑」

この碑は、1617年（元和3）から1632年（寛永9）までの16年間に殉教し、1865年（慶應元）に、当時のローマ法王ピオ9世によって、福者に列せられた205名を顕彰したものである。その内訳は、大村の帶取で処刑されたペドロ、マシャド神父、放虎原で殉教したソテロ神父など28名、長崎での殉教者151名を中心に全国に及ぶ。国籍は、日本153名、スペイン24名、ポルトガル5名、イタリア5名、メキシコ3名、オランダ・ベルギー各1名であるが、秀吉の朝鮮侵攻で連行された朝鮮人13名が含まれることが特筆できる。小さな「顕彰碑」も建つ。

### (2) 「大村潜伏キリスト教徒殉教顕彰碑」

1657年（明暦3）に郡村を中心に潜伏キリストが発覚し、大量に処刑された事件を「郡崩れ」という。この殉教者を顕彰した碑である。この事件では608名が捕らえられたが、大村藩だけでは吟味取り調べができず、長崎、平戸、島原、佐賀でも行われた。411名が斬首されるが、このうち131名がここ放虎原で処刑された。その首は獄門にかけられた後、首と胴に別けて埋められた。

# 大村藩とキリスト教

## <純忠の時代>

1533年(天文2)、有馬家に生まれた純忠は養子として大村家に入り、1550年(天文19)に家督を継ぐ。代わりに実子の貴明は武雄の後藤家に養子に出された。このため家臣には貴明支持勢力が強く、近隣の龍造寺、松浦、西郷にも常に圧迫された。しかも直轄地はわずかしかなかったため、南蛮貿易の利益を求めてキリスト教を受け入れる。

これまで平戸に入港していたポルトガル船が、新しい入港先を求めていたため、純忠は1562年(永禄5)に横瀬浦を開港し、翌1563年(永禄6)には家臣とともにキリスト教の洗礼を受ける。横瀬浦が反対派に焼き討ちされると、純忠は福田、そして1571年(元亀2)に長崎を開港する。さらに純忠は、1574年(天正2)に領内寺社を破却し、キリスト教を領民に強制する。1580年(天正8)に純忠はイエズス会に長崎を寄進するが、ルセナ神父は「長崎が、周辺の強大な勢力によって奪い取られる危険を感じたからである」と述べている。晩年は、坂口館に隠居、1587年(天正15)に死去した。当時教会であった宝生寺に葬られたという。純忠のキリスト教受容は、経済的動機からであったが、彼自身は非常に熱心な信徒だった。このことが、大村をキリストン王国にした。

## よしあき <喜前の時代>

純忠を嗣いだ喜前は、領地の維持と信仰の間で揺れ動いた。秀吉の九州侵攻で領地を安堵され、朝鮮出兵で家臣団をまとめて藩体制を確立していった。この頃には6万人の信徒を数え、キリスト教天国の観を呈していた。信徒共同体も各地に組織されていった。

ところが、秀吉は1587年(天正15)に伴天連追放令を出し、禁教に一步踏み出す。徳川の世になると禁教はいっそう鮮明になった。1605年(慶長10)、揺れ動いていた喜前は、棄教して領内から宣教師を追放し、日蓮宗に帰依して本経寺を建設する。1614年(慶長19)、全国に禁教令がだされると、わずかに残っていた宣教師も追われ、教会も破壊された。

## <殉教の時代>

1614年(慶長19)、純忠が大村家を嗣ぐと弾圧は激化した。1617年(元和3)、潜伏して布教を続けた宣教師が郡と鷹島で殉教した。1619年(元和5)には鈴田牢がつくられ、1622年(元和8)の「元和大殉教」で、収容されていた宣教師が長崎と放虎原で殉教した。その後も領内各地で宣教師や信徒の殉教が続いた。

## <郡崩れ>

1637年(寛永14)の島原・天草一揆から20年、1657年(明暦3)、郡村で潜伏キリシタンが発覚した。長崎奉行からの通報で、大村藩は探索を始め、608名が捕縛された。人数の多さに近隣の長崎、平戸、島原、佐賀にも振り分けられ取り調べが行われた結果、411名が斬首に決し、うち131名が長崎奉行派遣の検使のもと、放虎原で処刑された。その首は晒された後、首と胴に別けて埋葬された。

この事件は、大村藩に大きな影響を与えた。いっそう厳しい禁教政策がとられ、「村々制法」の制定、5人組の組織、横目による監視など、キリシタン禁制を軸に農村統治を強めていく。

## <潜伏キリシタンの時代>

郡崩れとその後の禁教政策で、大村藩領内のキリシタンは壊滅したはずであった。ところが、外海地方の一部には密かに信仰を守る潜伏キリシタンが残った。黒崎の枯松神社は、彼らの聖地でもあった。18世紀の後半には2度にわたって、信仰を秘したまま外海から五島に移住する人たちもいた。また、「浦上一番崩れ」にあたって、不審な信仰をするものを、大村藩は「邪宗」(キリシタン)ではなく、「異宗」として対処している。事実は潜伏キリシタンであったが、藩としては曖昧にしておきたかったのであろう。

1865年(慶應元)、浦上に続いて外海の出津でもキリシタンが復活する。

## 郡崩れ

1637年(寛永14)の島原・天草一揆から20年、厳しいキリスト教禁圧政策で、大村領内にも、キリシタンは一人もいなくなつたと思われていた。ところが1657年(明暦3)、郡村を中心に、隠れて信仰を続けていた人たちが大量に発覚した。

発端は矢次村の百姓兵作が、長崎に出て「郡村内の矢次村に六兵衛母子があり、萱瀬の岩穴に切支丹の絵を隠し持っている」と漏らしたことから長崎奉行所に伝わり、長崎奉行所からの通報で、大村領内での潜伏キリシタン探索が始まる。

その結果翌年(万治元)7月までに、608名が捕縛された。大村藩だけでは措置に困り、隣接の長崎、平戸、島原、佐賀にも別けて調べたところ、99名が赦免、牢内病死78名、永牢20名、411名が斬首に決した。このうち131名が長崎奉行派遣の検使のもと、放虎原で処刑される。その首は、厳重な監視下のもと「獄門所」で20日間晒され、胴とは別々に埋められた。その跡が、原口の「首塚」と桜馬場の「胴塚」である。

これは、藩の存続にもかかわる大事件であり、この後大村藩は、禁教政策を軸に、急速に藩内統治体制を整えていく。<sup>①</sup>村々の在地家臣からキリシタン監視の起請文を出させた。<sup>②</sup>また、在地家臣の中に横目をおき、村人を監視させた。<sup>③</sup>踏み絵を再開し、<sup>④</sup>5人組による相互監視の体制を取った。<sup>⑤</sup>「村々制法」など法令を整え、農村支配を強め、<sup>⑥</sup>神仏信仰を強要したり、寺請手形を出させた。<sup>⑦</sup>キリシタン道具を没収・焼却するとともに、キリシタン墓石を徹底して搜索させ、破壊した。このように、郡崩れは、大村藩に多大の影響を残した。



首塚



胴塚

## 池田乱民の変

1865年(慶応元)4月4日、大村領池田で騒動があった。放虎野にあった被差別部落が襲撃され、焼打ち・殴殺にあった事件である。

～六日又会し遂に放虎野の所為なるを疑い、その衆およそ五百人屠児の家に進撃し、その家を焼き、竹槍及び棓を以て男女十余人を殴殺す。  
これより先き池田・久原・萱瀬・竹松・福重・鈴田各村牛馬斃るもの夥し。  
人民あるいは屠児の所為なるを疑い、池田の卒及び農夫等伴を結び隣村を誘惑す。隣村もまたこれに應えんとす。会々乞児団飯の事あり。故にこの難に及ぶ。(「九葉実録」一部抜粋)

ここでいう「屠児」とは江戸時代に「かわた」「えた」と呼ばれた被差別部落民を指す。「九葉実録」は明治8・9年ごろ編纂されたとされ、この「屠児」という言葉が江戸時代使われたかは定かではない。ちなみに「郷村記」には「大村の内 池田分」に「宝庫野 皮屋渡」という記載が見え、この皮屋も被差別部落を指している。

事件の概要を追ってみよう。杭出津の農民寅松の家に乞食父子3人が来て、もっていた握り飯を馬に食わせている。寅松の妻はこれを見て毒ではないかと疑った。宗門の点検を受けるために庄屋に集まっていた郷民に知らせたがすでにいなかつた。手分けして捜し問いただすと、最初はおにぎりを落したからといい、ついには2人の婦人に頼まれたからと白状し、郷民の疑いはますます強くなったというのである。引用文には、放虎野の所為なるを疑いとあり、その衆500名で屠児の家を襲い、焼き、竹槍やつえで男女十余人を殴殺したとある。なぜなら、以前から池田・久原・萱瀬・竹松・福重・鈴田などの村々で牛馬が数多く死んでいたから、「屠児」に疑惑がもたれたのである。このことは、当地の部落で斃れ牛馬の処理が行なわれていたことを示している。

この時代、大村藩は佐幕派、勤皇派に別れ、混乱な世相にあった。部落への襲撃もそうした時代への不安が背景にあり、確たる証拠もない被差別部落への「噂話」が焼き討ち、殴殺にいたるという差別の恐ろしさを物語っている。

1866年(慶応2)12月の記事には「7日客歳(昨年)屠児を殺せる池田の乱民を或いは獄に繋ぎ或いは徒刑に処す 各差あり」(「九葉実録」とある。

# 5 第21海軍航空廠

平成十六年十月



第21海軍航空廠本部序合寫真



大村市教育委員会

案内板

## ■海軍航空廠の開庁

帝国海軍は、1903年（明治36）、横須賀・吳・佐世保・舞鶴に海軍工廠を設けた。佐世保工廠の役割は、海軍の中にあって軍需物資補給の基地が重点であり、中・小型巡洋艦の建造開発が主力とされた。

※工廠(こうじょう)：軍隊直屬の軍需工場で、武器・弾薬をはじめとする軍需品を開発・製造・修理・貯蔵・支給するための施設。造兵廠とも呼ばれる。大日本帝国陸・海軍はそれぞれ直轄の軍需工場を持っていた。

海軍工廠航空機部の拡充にともない、佐世保立神にあった海軍工廠が手狭になり、大村移転が決定し、海軍建築部による航空工廠建設が開始された。

1941年（昭和16）10月1日の開庁当時は200人ほどの人員で始まったが、その後、1943年（昭和18）4月頃、ようやく基幹工場が完成し、大量の人員の収容が始まり、徴用工・学徒・挺身隊（12歳以上40歳未満）が主に動員された。総面積122万2000坪余の大村海軍航空廠は、東洋一と海軍が謳るものであった。

※航空廠の「従業員」は3万3千余名という記録があるが、当時の市  
の人口は約10万人であった。

## 第二十一海軍航空廠

大村市古賀島町

■大村空襲

1944年（昭和19）10月25日、航空廠は米軍による大規模な空襲を受けた。中国・成都から渡ってきた78機の米爆撃機B29は、9時55分、同廠の上空から波状爆撃を展開した。爆死した者252名、重傷者300余名の犠牲者を出し、航空廠の施設は壊滅的打撃を受けた。これを大本営は「戦果二閥シテハ目下調査中ニシテ、我力方若干ノ損害アリ」と発表した。

その後も、大村市では終戦まで数十回に及ぶ空襲があったとされ、市民にも大きな被害をもたらした。

### ■「無差別爆撃」の発信基地

「戦略爆撃の思想」（前田哲男著）によると、こうした被害の半面、大村の地から飛び立った日本の攻撃機が中国の都市を爆撃した事実も存在する。

日中戦争勃発直後の1937年（昭和12）8月15日、大村海軍航空隊基地を発進した九六式陸上攻撃機20機が中国・南京を爆撃。世界で初めての本格的な「渡洋爆撃」であった。この爆撃は「無差別爆撃」と国際社会の非難を浴びた。

参考：「長崎新聞」2005年6月14日

## ■大村空襲の証言

(略)高射機関銃、高射砲の射撃音が一斉にひびき渡る。白い銀翼が晴れ渡った秋空高く何千メートルか知らぬが数十機見事な編隊を組み、かすかな爆音を響かせながら臼島方向から空砲方向に堂々たる進攻である。(中略)トタンを引きずるような無数の爆弾の投下音、地獄に引き込むような気味悪い響き、一波二波と連続何十発かの爆発音、腹わたを押ししほぶるような風圧と耳をつんざくような爆音、壕内は一瞬声もなく、弾着毎に壕の天井から降りそぞく砂をかぶりながら、息も止まる思いで無言のままなりゆきを見守る外はなかつた。爆発音と振動その都度、壕の奥へ奥へと押込んでいた。(中略)爆撃の最中、他の一工員が私達の壕内に倒れこむように飛び込んで来て隣の発動機工場は全滅です。只今は火の海ですと、息せききって知させてくれた。爆撃は終わった。(以下略)

出典：片岡源一郎編『回想 第21海軍航空廠』（1978年）

## □第21海軍航空廠防空壕跡(大村市古賀島町)



□掩体壕(大村市原口町)



## □慰靈塔公園(大村市協和町)



慰靈のため、工廠内に設置されていた防空壕の上に慰靈塔が建てられた。工廠内には、ここだけでなく数多くの防空壕が造られていた。現存しているのは、この慰靈塔公園にあるものと、古賀島町の第21海軍航空廠防空壕跡の2つだけである。

海軍工廠は、当初、工廠職員と募集や徴用によって集まった工員で構成していたが、戦局が悪化すると国家総動員法が公布され、動員学徒や女子挺身隊が西日本各地から集められ、沖縄や朝鮮の人々も動員された。公園にはそれらの名が刻まれた碑もある。

第21海軍航空廠の本部庁舎前に設置された地下式防空壕の遺構。大村郵便局近くに現在も残されており、大村空襲の激しさを伝える弾痕を留めている。市内には、他に工員養成所門跡（松並1丁目）、海軍病院跡（久原2丁目）などの第21海軍航空廠の遺構がある。

海軍大村航空隊に設置された航空機用の防空施設。大村海軍航空隊は1922年（大正11）12月に開隊され、敗戦の1945年まで存続した。掩体壕についての記録はなく設置時期は判明しない。掩体壕は、大村市立桜が原中学校のすぐ近く、下原口公園内にある。

## 6 本経寺



大村市古町



クルス灯籠

本経寺を建立したのは、キリスト大名大村純忠の後を継いだ喜前である。純忠の時代には、大村領は神社・仏閣は破壊されキリスト教一色であった。喜前もドン・サンチョという洗礼名をもつキリストンであったが、豊臣秀吉の九州進攻で所領を安堵され、朝鮮出兵にも参陣するなど、地歩を固める一方で、秀吉が伴天連追放令をだし徳川幕府も禁教政策をとったため、信仰との間で苦悩することになる。

この間加藤清正の知遇を得て、1605年（慶長10）に宣教師を追放してキリスト教を棄教し、日蓮宗に帰依した。この年に熊本本妙寺から日惠上人を招いて寺の建設をはじめ、1608年（慶長13）に伽藍が完成した。

本経寺の建設は、キリスト全盛の大村領における寺院復興の最初であり、仏教への帰依をアピールするものであった。その後、領内に建立される末寺も、キリストンが多かった地域へくさびのように打ち込まれたとされる。

境内に隣接する大村家墓地には、初代藩主喜前から11代純顕までの歴代藩主とその家族の墓が立ち並んでいる。いずれも6メートルを超える巨大なもので、立派な細工が施されており、壯觀である。これらは近くを通る長崎街道からも、埠越しに望むことができたといわれ、純忠の時代にキリスト大名であった大村家が、幕府のキリストン禁教政策のもとで領民に対して仏教信仰を示すために建てたと考えられている。

ところで、坂口館で亡くなった純忠は、当時教会であった宝生寺に埋葬された後、ここ本経寺に移されたとされるが、これらの墓石の中には純忠のものなく、現在は所在不明になっている。

## 7 石井筆子の像



大村市玖島一丁目(大村小学校・五教館御正門横)

大村小学校には、藩校の五教館御成門が残されている。この門の脇に平成14年、「2002大村市偉人顕彰事業」として石井筆子の像が建てられた。

石井筆子は1861年（文久元）大村玖島郷で生まれた。父は渡辺清で、討幕派の志士であり維新後は福岡県令や元老院議官を務めた。筆子は11歳（明治5年）のとき上京するが、幼少期は幕府が倒れ明治維新が行なわれた大変な激動期であった。大村藩でも大村騒動で佐幕派20数人が捕えられ、処刑されるという事件が起り、渡辺清や伯父昇<sup>のぼり</sup>は倒幕一勤皇派の中心人物として、また父清は戊辰戦争のとき新精隊を率いて京都に向かっている。

上京の翌年東京女学校に入学、1877年（明治10）年16歳のとき、ホイットニ一家の英語塾に入門、娘のクララと交友を深める。筆子にとって、クララはよき相談相手であり、精神的な影響を受けたとされる。19歳のときフランスに留学、慈善活動などを見る。1年10ヶ月滞在し、帰国。1884年（明治17）、23歳のとき、大村藩で代々家老を務めた家の小鹿島果<sup>はたす</sup>と結婚、親同士の決めた結婚であったため、筆子には抵抗があったという。

このころ、フランスから法整備のため政府から招かれたボアソナードと交流。当時のフランスは民主主義が充実しており、「人権については、家柄、経歴、お金とは関係なしに人の価値はあり、権利と自由は保障されるべきとの時代原理を、文明の中心地での多くの見聞と対話を通じて筆子は知っていく」（※61頁）のである。

筆子の随筆である「思ひ出づるまゝ」には次のような文章が認められている。「世の論者、女子に高等の教育を授くるは結婚を忌むの媒となる、故に女子の教育は或程度に止むへしという、実にそは男子の僻論にして女子の心理を知らざるものゝ説なり／（略）心に適ふ理想の夫なき場合には、結婚を謝絶するも何の責かこれあらん」、1897年（明治30）に発行された「大日本婦人教育会雑誌」に執筆されたものであり、まさに女性問題の先駆者といえよう。

結婚の2年後、25歳で長女が生まれ知的障害を持っていた。この歳、長女とともに洗礼を受ける。次女・三女も幼くして死去。また、夫果も1892年（明治25）、31歳のとき病気で死去する。1898年（明治31）、筆子は津田梅子とともに、万国婦人クラブ大会に出席するため渡米する。

佐賀の人石井亮一は、1891年（明治24）に弧女学園を創立、1897年（明治30）に滝乃川学園と改称。同校で、筆子は女子の社会的自立をめざす職業教育を担当し、亮一は知的障害児の教育を行なう共同事業が始まる（※39頁）。1903年（明治36）、42歳のとき、石井亮一と結婚。1920年（大正9）、59歳のとき学園は火事にあい、閉鎖を決意するが再建。1937年（昭和12）、76歳のとき、夫亮一が死去。筆子は第2代学園長に就任。1944年（昭和19）、83歳で永眠した。

※一番ヶ瀬康子他編『無名の人 石井筆子』（ドメス出版、2004年3月）

参考

## 8 針尾山トンネル工場跡



大村市岩松町

1944年（昭和19）10月25日の大村空襲後、分散移転した工場のうち大村市南部の鈴田の丘陵地帯に隧道を掘削し、廠本部・会計事務所・補給部事務所・飛行機部品作業・発動機械工場・飛行機械工場を移転することが決定された。

掘削や経緯について次のような記録がある。「稻川内山に4力所間口2米70高さ2米50、針尾山に4力所長さ140米余を20年3月末より施設部土木課にて着工されたのであります。……作業員や岸盤の関係特に爆破用の火薬の不足によって意の如く進みませず6月末迄に貫通しました隧道は、御真影奉安所となります第1号隧道と、工作機械作業場となります、第7号第8号だけでこの為発動機部では……第8隧道に130余台第7号隧道に80余台据付けられ……7月頃から作業を開始されたのであります。廠長用の第1号隧道は偶々中間に長さ10米余の落盤があって……一切の設備も13日頃に竣工しましたが、第2、第3、第4、第5、第6隧道は岸盤は強固の上火薬不足の為遅々として進行しませんが……この旨を廠長に報告しますとそれでは16日から隧道で執務を開始するから、そのつもりで準備せよとの命令で15日筆者の事務室全員で…（準備を済ませた）…所11時でしたか……戦争は終戦になったので……帰廠せよという命令で…」

出典：野口貞一『第21海軍航空廠沿革史概要』（1972年3月）

## 朝鮮人の強制労働

牧師だった故岡正治氏が在日朝鮮人への差別撤廃を訴えて設立した市民団体である「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」（代表：高實康稔）は、朝鮮人被爆者の実態調査を実施した。その方法は、戦時中、長崎市と周辺部に存在した朝鮮人労務者の飯場・工場・寮の跡を訪ね歩き、近所の古老や当時の関係者から飯場等の位置・規模・労務者の数・労働の実態等を聞き取るというものであった。この地道な調査にもとづき、人権を守る会では、長崎における朝鮮人被爆者の数は約2万人、そのうち死亡者は約1万人との推計を発表した。その後も継続的に調査を行い、その結果を1982年から94年にかけて「原爆と朝鮮人」第1集～第6集として出版した。これらの報告集では、長崎市内の軍需工場や市周辺の離島の炭鉱（三菱端島・高島等）における朝鮮人の強制連行、強制労働と、被爆の実態だけでなく戦時に長崎県内に居住していた朝鮮人約7万人の強制連行等の実態を明らかにした。

大村においては、「第21海軍航空廠の地下兵器工場トンネル掘り作業関係の朝鮮人労務者は、岩松駅（針尾谷）200名とその家族50名、および陰平町1000名。大村海軍航空隊関係の作業員300名とその家族50名、諏訪・池田・植松・竹松・萱瀬・野田・福重、皆同地区などの軍施設および今富滑走路造成作業などには、家族を含めて500名、杭出津・古町などの市中心部に300名、大村海軍病院付近の久原郷に世帯持ちの宿舎などに300名、合計2700名と推定する」と報告している。

### ■証言 M氏（当時大村中学校生、証言は1991年）

鈴田には、昭和19年9月、佐世保から祖父母の家に独りで疎開し、翌年4月大村中学校に入学しました。6月、佐世保空襲の後、海軍病院に努めていた父も大村に転居しました。

空廠の隧道の場所は分かりますよ。稻川内のこの隧道ははっきり覚えています。作業に当たった朝鮮の方は、鈴田に数百人いたようです。アリラン・トラジの歌を教えてもらい、その意味を聞いたことがあります。朝鮮の方は、他所の作業場から移ってきたのではなく、韓国から直接連行されてきたのではないかと思います。

朝鮮人は、飯場だけではなく、民家にも寝泊まりしていました。民家には、家族で、また単身者がグループでいました。家を提供した土地の人は、暖かく待遇していました。私の家には、日本人の監督と家族が同居することになりました。家の下の所に飯場がありましたら、1階建てで、中が3つに区分されていたようです。中を見たことがあります、1つの部屋が十畳くらいでしたかね。ざこ寝だったでしょう。何人ぐらいがそこに住んでいたかは分かりません。この長屋のような建物がいくつありました。旧岩松駅の向こう側にもいくつも飯場があったことは覚えています。横山頭にも朝鮮人がいました。塩をそこに持つて配給の砂糖と交換したことがありましたから。

終戦後、短期間でここ朝鮮の方は、いなくなりました。鈴田に残った人のことはわかりませんが、町の方にはたくさん残っています。



大村市陰平町

鈴田牢跡平面図

大村領は戦国時代末期には、領主大村純忠がキリスト教徒の大名であったため、領民はすべてがキリスト教徒で、信者は6万人といわれるほどキリスト教の盛んな土地であった。しかし、江戸時代に入ると、キリスト教の禁教が厳しさを増し、宣教師はすべて国外に追放されるが、密かに日本に残って布教活動にあたった宣教師もいた。

陰平町の小高い丘の上にある鈴田牢には、1617年（元和3）7月から1622年（元和9）9月までの5年間、長崎奉行所に捕らえられた宣教師などが閉じ込められていた。記録によると非常に狭い間隔の柱で囲まれた鳥かごのような牢屋で、外には二重に柵が設けられ、入口は二重の鍵がかけられていた。奥行き5.3メートル、間口3.5メートルでわずか8坪しかない建物は、藁葺きの屋根はあったものの寒気が厳しく、この狭い空間に多い時で33人の人々が入れられていた。横になることはもちろん、身動きも自由にできなかったという。

この牢に閉じ込められていた人々のうち、2名は牢内で亡くなり、スピノラ神父ら25名は1622年（元和9）9月10日長崎の西坂で殉教、フランコ神父ら8人は遅れて12日大村の放虎原で殉教した。これらは「元和大殉教」と呼ばれる。

1945年（昭和20）8月15日の太平洋戦争終結後、海外に残された日本人は、総人口の約9%にあたる630万人（軍人・軍属330万人、一般人300万人）以上といわれ、同年9月28日横浜、浦賀、舞鶴、呉、仙崎、下関、門司、博多、佐世保、鹿児島の10港が引揚港に指定された。佐世保では、針尾島浦頭に厚生省佐世保引揚援護局の検疫所が置かれ、引揚業務を開始した。10月14日米軍の上陸用舟艇（LST）で、韓国の濟州島から旧陸軍軍人9997人が揚陸したのを始め、以後1950年4月までに、主に中国大陆や南方諸島から引揚船1216隻により、一般邦人・軍人・軍属合わせて139万人以上の人々が、引揚げの第一歩を印した。

引揚者は、当地から引揚援護局本所がある旧針尾海兵团（現在のハウステンボスの場所）まで約7kmを徒歩で移動して諸手続きの後、旧国鉄大村線南風崎駅から引揚列車によりそれぞれの郷里へ戻った。帰国途中でなくなったり人は、火葬され、本佛寺の釜墓地に葬られた。

一方、強制連行などで日本各地で働いていた朝鮮や中国の人たちは、ここから祖国に帰っていった。

1986年（昭和61）、旧検疫所跡地を見下ろす丘陵部に当公園が建設された。公園内には、引揚記念資料館、引揚者像・平和の像、「かえり船」田端義夫歌唱碑があり、元揚陸桟橋あたりに「引揚第一歩の地」と書かれた碑が建っている。

引揚記念資料館

〒859-3454 佐世保市針尾北町824 TEL0956-58-2561



案内板－引揚者総数－



「引揚第一歩の地」碑



引揚記念資料館



引揚者像・平和の像

## 11 針尾送信所無線塔



西海橋公園から無線塔を望む



無線塔内部

針尾送信所無線塔は、日本海軍佐世保鎮守府の無線送信所として、1918年（大正7）11月に着工、1922年（大正11）にかけて建設した現存する唯一の長波無線通信施設である。その高さは1号及び2号塔が135m、3号塔が137mで、一辺が300mの正三角形を構成するよう配置されており、当時の最高水準の鉄筋コンクリート技術を示す戦争遺構である。総工費は当時で155万円（現在の貨幣価値に換算すると約250億円）という。41年（昭和16）12月、太平洋戦争の開戦時、真珠湾奇襲を命じた「ニイタカヤマノボレ」を発信したとの説もある。

戦後は海上保安庁に移管され海の安全と治安に活躍、97年（平成9）に新たな送信施設へ移転するまで使用されていた。

国の文化審議会は2011年（平成23）10月、この「旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設」と長崎市西出津町の「出津教会堂」を新たな国的重要文化財に指定するよう答申した。

佐世保市には、他に、針尾島内の浦頭引揚記念平和公園、南風崎駅構内案内板、本佛寺（佐世保市江上町）の戦没者釜墓地や宮地区の無窮洞などに、第二次世界大戦の傷跡が残っている。

## 12 釜墓地



佐世保市江上町

佐世保市の針尾島、ハウステンボスと米軍針尾住宅を抜けた先に「釜墓地」がある。

1949年（昭和24）1月9日、フィリピン・マニラから最後の引き揚げ船「ぼごだ丸」が佐世保市針尾北町の浦頭港に入港。軍人・軍属4515人の遺体と、ニューギニアで亡くなった軍人307人の遺骨が運ばれた。米軍はローマ字と英語で書かれた4822人分の名簿を添えていたが、ごく一部の人しか遺骨は渡っていない。ほとんどの遺体や遺骨は、そのまま野積みされていた。

また、そのほかに、先に引き揚げていたものの郷里に向かう列車を南風崎駅周辺などで待つ間に力尽きて亡くなった人たち、戦後、フィリピンの捕虜収容所に入れられていた在留邦人で収容中に病死した人たちなど約2000人の遺体も運ばれている。

これら約6500人の遺体は、釜海岸で約一ヶ月間かけて火葬された。この時、大量に出た遺骨や遺灰を集めて土盛りし、白木の供養塔を建てた。その後、同援護局の閉鎖に伴い荒れ果てた時期もあったが、日蓮宗僧田尻文亮らが慰靈碑建立を目的に托鉢を開始し、1959年慰靈碑を建立。1964年、旧援護局衛門詰所の払い下げを受け、御堂（本佛寺）とし梵鐘を建設した。1982年戦没者釜墓地護持会が結成され、現在は社団法人・佐世保釜墓地戦没者護持会が管理している。

戦後67年経って、戦没者釜墓地護持会が確認した身元はわずか572人にすぎず、今も遺族探しが続いている。

## 13 無窮洞



内部



佐世保市城間町  
入口

佐世保市の宮地区には、太平洋戦争中の1943年（昭和18）から敗戦の1945年8月15日まで、当時の宮村国民学校の教師と子どもたちが掘り続けた巨大な防空壕がある。空襲などに備え、現在の小学6年～中学生にあたる子どもたちが、学校の裏山にあつた一枚岩（凝灰角礫岩）を鍬やツルハシを使って掘削した。中の主洞は幅約5m、奥行き約20m、広さは全部で70坪（231m<sup>2</sup>）。当時の生徒約600名が避難できたという大型の防空壕で、岩を削って造った教壇やかまどまで設けられている。

宮支所から川を隔て小高い雑木林がある。この辺り一帯が戦後まで宮小学校があった場所で、記念碑の背後の岩肌には「無窮洞」という文字が彫られている。建造を計画した当時の校長が、永遠に朽ちず、子どもたちがすくすくと育つように、との願いを込めて名づけたそうである。

敗戦が近づくと、この辺もグラマンによる機銃掃射が行なわれた。生徒たちも実際に数回避難し、静かに息を潜め、戦闘機が過ぎ去るのを待った。1945年、長崎から全身が焼けただれた人々が次々と運び込まれた。被爆者の避難所として使われたのである。

## 14 特攻殉國の碑



東彼杵郡川棚町新谷郷

1944年（昭和19）5月、川棚町新谷郷と小串郷一帯に、横須賀水雷学校の分校として、臨時魚雷艇訓練所が開設された。本部のあった新谷郷塩浜を中心として、西側の深浦から東側の現小串郷駅東部及び北側の山の手一帯に訓練所施設があった。魚雷や機雷を装備した水雷艇の搭乗員を養成する名目であったが、間もなく小型高速特攻艇「震洋」の訓練が始まり、敗戦間際までひそかに続いた。

震洋は長さ約5～6.5mのペニヤ板製で、船首部分に250kg爆弾を装備。国内外の海岸の掩体壕などに潜んで敵艦を待ち伏せし、一人または二人が乗り約25ノット（時速約46km）で主に夜間に突撃した。

訓練期間は約2ヶ月、訓練生は全国から志願してきた20歳前後の若者。鉄の不足と油の枯渇で乗る飛行機がなくなった海軍飛行予科練習生など、約6500人が神奈川県横須賀市や川棚町で訓練を受けた。

震洋部隊はフィリピンのコレヒドール、沖縄で敵艦数隻を撃沈した記録があるが、出撃前に攻撃を受けて戦死したケース多かった。訓練中の事故死、汽車への飛び込み自殺もあったという。

新谷郷の訓練所跡地に、1967年5月建立された「特攻殉國の碑」には震洋の戦死者約2500人を含む3511人の名が刻まれている。

同地には、2012年（平成24）に「特攻殉國の碑資料館」が建設され、2013年5月に開館する予定である。

## 15 片島魚雷発射試験場跡



東彼杵郡川棚町三越郷片島

1889年（明治22）佐世保鎮守府が開庁されて間もなく、海軍工廠が佐世保湾の北岸に開設された。この工場で製造される魚雷を実際に発射実験するために、1918年（大正7）川棚村三越郷の片島に魚形水雷発射試験場が設置された。発射した魚雷の進行状況を頂上の観測所から観測し性能試験を行った。太平洋戦争勃発後、1942年（昭和17）、軍備増産と空爆被害の分散を図るため、百津郷の海浜約20町歩（1町歩は約1万m<sup>2</sup>）を埋め立てて工場を急造し、川棚分工廠を設置した。分工廠が設置されたことに伴い、魚雷発射場の施設がさらに拡張され、その際に片島は海峡が埋め立てられて陸続きとなつた。軍用地の総面積は、川棚町の耕地総面積の三分の一となる。翌年、川棚海軍工廠として独立、航空魚雷工場として日本一の生産能力をもつていた。

現在は「魚雷発射試験場」と呼ばれているこの施設は、川棚町三越郷片島の海に囲まれた岬の先端近くに位置する。

この試験場から西彼杵半島北岸の小さな二つの島の中間を発射目標として発射試験が繰り返されたと言われているが、町民はもとより軍人さえもその存在はひた隠しにされていたことから、詳しい資料はほとんど残っていない。

片島には他にも、石や煉瓦造の魚雷庫、魚雷の進行状況を観測した観測所などの遺構がある。

### 参考文献

『長崎県史 藩政編』（「大村藩」）

『大村見聞集』

『九葉実録』

『大村郷村記』

長崎新聞

片岡源一郎編『回想 第21海軍航空廠』（1978年）

一番ヶ瀬康子他編『無名の人 石井筆子』（ドメス出版、2004年）

野口貞一『第21海軍航空廠沿革史概要』（1972年）

『原爆と朝鮮人』（1集～6集、朝鮮人の人権を守る会編）

「慰哭の釜墓地」（社団法人・佐世保釜墓地戦没者護持会）

その他

デザイン・カット 西岡由香

### ガイドブック

#### 大村湾沿岸をフィールドワークする —キリスト教受難と戦争の遺構を訪ねて—

2012年11月30日発行

NPO法人長崎人権研究所

〒850-0048 長崎市上銭座町2番7号

Tel 095(847)8690 Fax 095(847)8696

E-mail anan@sings.jp

<http://homepage3.nifty.com/naga-humanrights/>





ガイドブック

# 大村湾沿岸を フィールドワークする —キリスト教受難と 戦争の遺構を訪ねて—

NPO法人  
長崎人権研究所